

HUMAN Me-ism



AOI FUJIMOTO

You don't have to LOOK like a patient with an incurable disease

不二本善生 ●イラストレーター
流病性大腸炎

◆好きな言葉：尊敬すべき偉大な人は、逆境にいても、つまらぬことはよくよせず、(中略)自分の心がけを良くし、根本から再生の努力をする人である。(武者小路実篤「幸福について」より)

◆得意な言葉：あたりまえ
◆イラストレーターになっただけなら、この道しか考えられない
◆一番好きな食べ物：コーヒー、ビーフ
◆一番嫌いな食べ物：菜っ葉の煮物
※不二本善生さんのインタビューは56ページから

難病患者らしくない人たち

就職、結婚、出産……。『難病患者』には、未来が閉ざされた印象がある。事実『難病患者』への理解が低い現実社会では、健康な人とは異なった生き方を課せられる。だが、『難病患者』だからこそ、人生を完全燃焼させる可能性を秘めているのではないだろうか？ 世間を恨まず、縮みず、顧みられずに、あくまで自らのスタイルを貫いていく、そんなパワフルな『難病患者』の自己主義をちょっとみてみよう。

難病患者らしくない人たち

就職、結婚、出産……。『難病患者』には、未来が閉ざされた印象がある。事実『難病患者』への理解が低い現実社会では、健康な人とは異なった生き方を課せられる。だが、『難病患者』だからこそ、人生を完全燃焼させる可能性を秘めているのではないだろうか？ 世間を恨まず、媚びず、誦らされず、あくまで自らのスタイルを貫いていく、そんなパワフルな『難病患者』の自己主義をちょっとみてみよう。



パソコンで絵を描く際の要用のペンタブレット



HumanMe-ism



喜んでもらうために描く

イラストレーター
不二本蒼生

イラストレーターとして40年以上の実績を持つ不二本蒼生さん。遊澤龍彦、筒井康隆、志茂田景樹、島田荘司、高橋克彦など有名作家の本の表紙などで見覚えのある方も多いかもしれない。60歳を超えた現在でも多忙な現役生活を送る不二本さんは、「私のイラストレーションは、他人に喜んでもらうために描いているんです」と言う。イラストを描けること、仕事があること、毎日の暮らしの中で、あたりまえのことに対する感謝が不二本さんの根底にある。そのことに気がついたのは、潰瘍性大腸炎という難病を患ってからだ。

■イラストレーターへの道

古都金沢に生まれた不二本さんは、幼少の頃から絵を描くのが大好きで、10代の頃から地元教育委員会のPRポスターコンクールなどで受賞した経験を持つ。高校卒業後、本格的に絵

の勉強をするため上京した。阿佐ヶ谷美術学園（現在の阿佐ヶ谷美術専門学校）へ進んだが、在学中から恩師となる浅川演彦の手伝いとしてイラスト制作現場で多くの仕事を体験。ついに学園を中退して実社会の荒波に飛び込んで行った。

「実はこの当時、女房とふたりで貧乏暮らしをはじめたのでのんびりと学生生活を送っている余裕がなかったんです」
喫茶店のマッチの図柄から商店のポスター、店名ロゴやパン

フレットなど、仕事は何でも引き受けたが、それでも経済的には苦しい生活を送った。いくつかの会社から社員への誘いがあったが、全て断った。

イラストレーターとしての幅を広げるため、ひとつの仕事ではなくたくさん仕事を体験したいと思っていました」

21歳の時、グループサウンズ「ザ・ライオンズ」のポスターコンクール特賞を受賞し、主催の東芝音楽工業株式会社（現在のEMIミュージック・ジャパン）

から30万円の賞金を受け取った。その翌年から「平凡パンチ」にイラストレーションが掲載されはじめ、多くの人と知り合い、大きな仕事が連鎖的に増えるようになっていく。

銀座にあるギャラリーオカベで、講談社後援のグループ展「エディトリアルアート」展が開かれ、23歳の不二本さんは初めて展覧会へ作品を出品した。その後、他の画廊でもたびたび展覧会に出品するようになり、「放送批評」「話の特集」など雑誌の仕事も増える一方だった。私

生活では第2子に恵まれ、仕事を追われながらも幸せな毎日を送っていた。20代から30代にかけてますますその仕事に磨きがかかり、海外でも作品が紹介され、高い評価を受けるようになる。

■難病と診断されて

不二本さんはイラストレー

ターとして、着々と実績を築いていった。体調不良でも仕事を断れば、次の依頼はなくなる。依頼主の無理な注文に応えるため不規則な生活が続くことも多かったが、若さもあって充実した日々だった。しかし、20代半ばから下血が見られるようになる。まさか病気とは考えもしなかった、と不二本さんは振り返る。気にしない、というよりは仕事に追われて気にしている暇がなかった。一日中座りっぱなしの仕事だから痔にでもなったかなと、思っていたという。

「病院に行かなかったわけではないんです。ただ、はっきりした病名は告げられなかったし、精密検査を受けようという話にもなりませんでした」

31歳の時、それまでもあった下血の症状がさらに悪化し、貧血でフラフラするようになる。当時住んでいた東京都青梅市の病院で検査を受けると、潰瘍



ふじもと 蒼生
不二本蒼生
1947年4月22日石川県金沢市に生まれる。A型。1979年潰瘍性大腸炎と診断される。現在は、治療も薬もいっさいせず体調は安定しているが、アルコールなどは控えている。作品に美文集『怪物伝説』（白泉社）など多数。東京イラストレーターズソサエティ会員。
不二本蒼生さんのHP「楽楽楽楽」 <http://www2.tadpole.jp/gol/>
不二本蒼生さんのブログ「楽楽楽楽 Lucky! Ao! Fu! Imoto」 <http://gold.ap.tascp.com/fujimoto/>

注3 放送批評懇話会発行の雑誌。現在の『月刊GALAG/ぎやらく』
注4 話の特集社発行の雑誌。永六輔、伊丹十三など多くの才能あるクリエイターを起用し人気を得た

注1 伊丹丹パーティの広告制作などをしていたデザインスタジオ・ユニのデザイナー
注2 平凡出版（現在のマガジンハウス）発行の週刊誌。一時は発行部数100万部を超えた人気雑誌

難病のおかげで、
感謝の気持ちが生まれた



デザインを手がけたモニュメント「親子馬」



画廊会場の不二本さん

性大腸炎との診断が下った。検査と治療方針の決定のために、1カ月以上の入院を余儀なくされた。たいした病気ではないと思っていた不二本さんだが、主治医に「人工肛門を造設した方が良いかもしれないが、将来的にもっと良い治療法が見つかる可能性もあるので、しばらく様子を見ましよう」と言われ、初めて病気の重さを実感した。

■生きることの素晴らしさ

フリーのイラストレーターにとって、入院は収入が途絶えることを意味する。不二本さんはとりあえず退院し、通院しながら仕事を続けた。依頼は増えつつ、「ダイエー白書」の扉絵、小学校算数教科書のさし絵など、仕事の幅も広がっていった。忙しさの中でしだいに病院から足が遠ざかり、あまりの仕事量の多さに、通院を怠るようになっていった。しばらくぶり

に診察室で対面した医師に「まだ生きていたかい」と冗談交じりに言われたこともあった。

1981年、東京から千葉県に引っ越した時には、特定疾患の申請をせずにはむほど症状は軽快していた。しかし、入院から得た教訓はその後も忘れず、喫煙は完全にやめ、飲酒も以前と比べればだいぶ減った。なにより、難病と診断され入院生活を経験したことにより、考え方に大きな変化が起こった。それまでは仕事を優先するあまり、食事や睡眠などをおろそかにしていたところもあったが、健康のありがたさに感謝し体調に気をつけるようになった。39歳の時に生きることの素晴らしさに感謝する意味で、ペンネームをそれまでの本名「藤本蒼」から「不二本蒼生」とした。

■依頼主に喜ばれるために描く

千葉県に引っ越してからも



(上) 2003年銀座スパン/アートギャラリーにて個展「萬力展」

(左) 「TOKYO ILLUSTRATION 2007」国立新美術館出品作「笑龍」



地元の中学校でイラストの講師を務めた

仕事は変わらない忙しさが続いた。しかし山林や農地など自然の残る土地で暮らすうちに、いつの間にか病気が気がにならなくなっていた。

「環境が変わったことが大きかったのではないかと自分では思っています。治ったという自覚はありませんね。ストレスがあると下痢気味になるし、腸が弱いのは変わりません」

貧血や腹痛もなく日々の生活に支障がないので、通院や服薬はしていないが、健康に気をつける生活は現在も続けている。

近年の不二本さんの仕事には、地元公民館での展覧会、市が発行する広報誌、公共公園の案内板のイラストや、市役所前に立つ親子馬の銅像のデザインなどがあり、地域への感謝の気持ちを感じられる。

仕事を通して、高校時代から憧れ、尊敬していた宇野亜喜良、久里洋二というふたりのクリ

エーターの知遇を得ることもできた。若い頃からイラストの仕事に打ち込んできた不二本さんには、この仕事为天職なのかもしれない。

「依頼されて描くのがイラストレーションで、依頼主に喜ばれるために描く。アートは自分のために描きたいものを描く」

不二本さんは、イラストとアートの違いをこう説明するが、その境目は曖昧だ。かつて依頼されて描いたイラストを、自分なりにアレンジし、多忙の合間を縫って自分のために描きためた絵が画集という形になったこともある。

「でも自分では、より他人に喜んでもらえるイラストレーションに向いていると思います」

イラストの仕事に生き甲斐を感じている不二本さんは、敬愛する葛飾北斎のようにありたいと、生涯現役でイラストレーションを描き続ける。

イラストレーターが天職です

